
「うぅ～っ　動けないよ～」
「離しやがれですわ！
あたくし達の自由を奪って、何を…！」


「ぴいっ!?　な、なにこれ…」
「なっ…そんなお汚らわしいモノを!?」


ズプッ


「んっ……っ！
あたくしに……こんなこと、よくも……！」


「離しなさい……離しなさいですわっ！
こんな豚なんかに……んぁっ……！」
グッブ
グッブ
グッブ


「やめて……やめてよぉ……
豚さん、優しくして……お願い……っ」
グッブッ
グッブッ
グッブッ


ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ


「痛いよぉ……！
中が裂けるみたいに痛いよぉ……！」
ズブッ
ズブッ
ズブッ
ズブッ


「え……!?　中に出すの……!?
いやっ、いやだよぉ……」
「待って……なさいっ！
この脈打ち……出す気ですわね!?」
ビュッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ

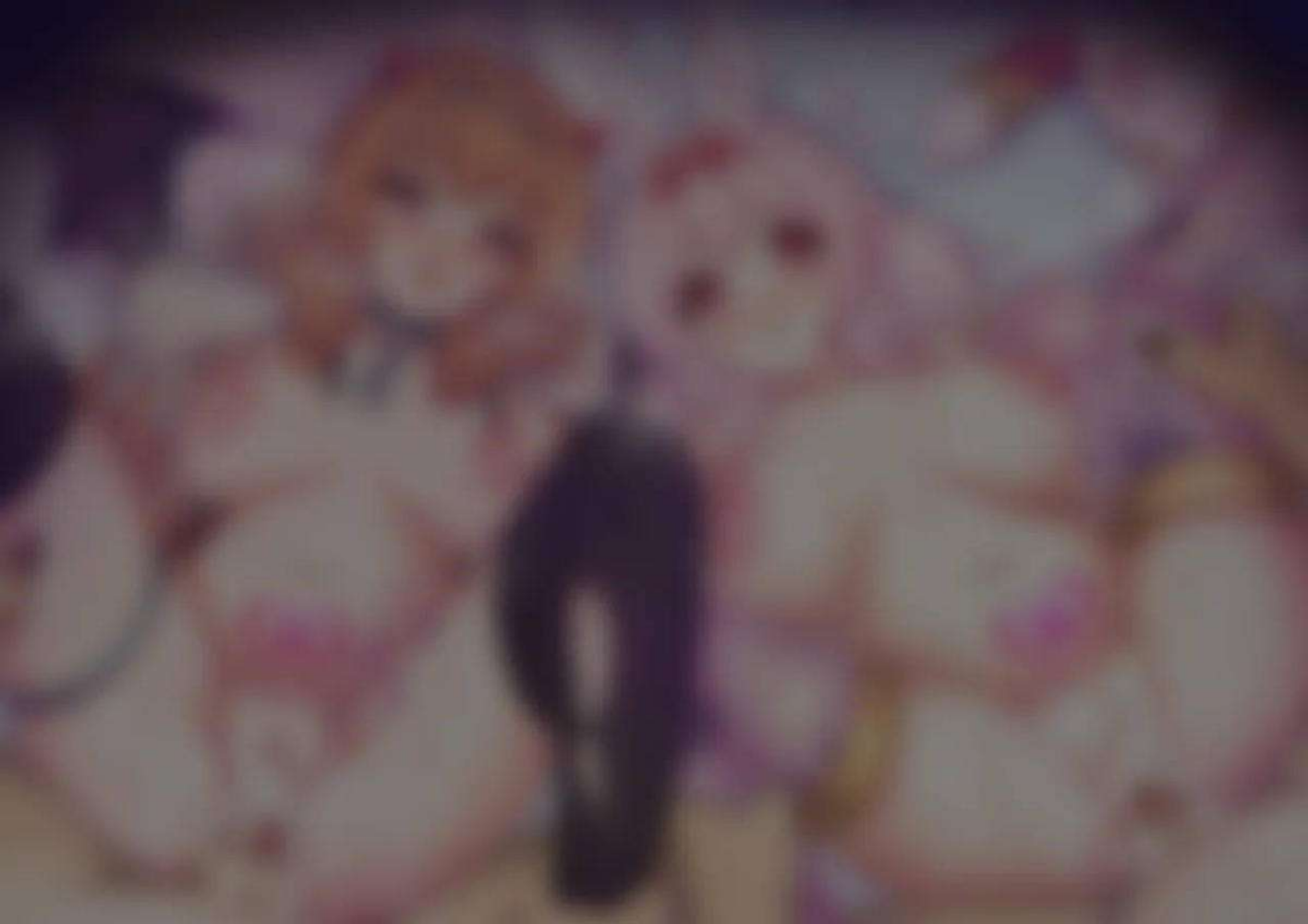

ドク
ドク
ドク
ドク
ドク
ドク


「んあぁっ……お腹、熱いよぉ……
いっぱい出されちゃった……」
「こんなにたくさん……あたくしの中に、
豚の子種を……っ、許しませんわよぉ……！」


「ま、まだやるつもりですの…？」
「やだっ　これ以上はムリだよう…！」
ボキーンッ
キュー
キュー



う…
い…いや…
だめぇッ
んぐッ




「気持ちいい…気持ちいいよぉ…♡
また何か来ちゃう…♡」
「んお。ぉ。っ♡
もっと注ぎやがれ、ですわ、ご主人様…♡」
あっ
ぉっ
ぐぽ
ぐぽ